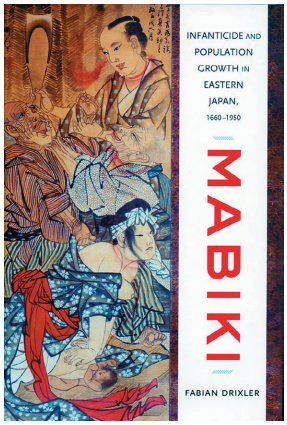
書評

ファビアン・ドリクスラ『間引き――東日本における嬰児殺しと人口増加 一六六〇―一九五〇』

Fabian Drixler, *Mabiki: Infanticide and Population Growth in Eastern Japan, 1660–1950*. Berkeley: University of California Press, 2013.

平井晶子



堕胎や間引きは長らく海外から注目されてきた。とりわけ歴史人口学／経済史の分野では直接的に熱い視線が向けられてきた。そして不思議なことに、否、むしろ当然の帰結としてか、海外の研究者は間引き（出生制限）の意義や頻度の高さを強調し、日本の研究者は頻度の低さを強調してきた。

一九七〇年代、T・C・スミス（Smith 1977）やS・ハンレーとK・ヤマムラ（Hanley and Yamamura 1977）は、間引きを強調し、速水融（一九九二）は、小作層では出生制限をしたかもしれないが、自作農ではあまりなかったと、間引きが部分的だったことを強調した[1]。研究が進み、資料や手法が整ってきてからも、（部分的には間引きがおこなわれていたが）徳川期の農村は自然出生力を基本とすると言われてきた（友部　一九九一）。

二〇〇〇年を過ぎると、東北を対象とする研究が増え、少なくとも東北地方では男女のバランスを取る出生制限があったと結論づけられた（Tsuya and Kurosu 2010）。さらに評者の分析でも、間引きの頻度には時代差があり、幕末に低下してきたことが見えてきた（平井　二〇〇八）。

一九九〇年代までは「中央日本」[2]を中心に日本が議論されていたが、その後、（中央日本とは人口・家族パタンが明らかにことなる）東北日本に注目が移ることで出生制限への評価も変わってきた。

この流れのなかで登場したのが、本書*MABIKI*である。本書は、若手日本史研究者のファビアン・ドリクスラが、ハーバード大学

に提出した博士論文をもとに著した、まさに力作と呼ぶにふさわしい一冊である。副題から分かるように、地域を東日本に、時代を一六六〇年から一九五〇年までと設定する本書は、独自の射程から間引きを捉え直す。地域を東日本に限定したのは、従来の研究から合理的に導き出せる判断であり容易に納得ができる。しかし、対象時期を徳川期ではなく、十七世紀から戦後の改正優生保護法の施行まで、すなわち戦後の中絶合法化までとした点には驚かされた。徳川期だけでも手に余ると感じる評者は、中絶合法化までを視野に入れなければ「語れない」著者の問題設定の大きさに感服した。

さっそく内容を見てみよう。本書は、序論と結論の間に、十七〜十八世紀を扱う第Ⅰ部、十九〜二十世紀を扱う第Ⅱ部があり、その後、七つの付論と膨大な参考文献が続く。

序論　拮抗する世界観と人口革命（第一章）
第Ⅰ部　低出生率を生みだす文化　一六六〇―一七九〇（第二章から第七章）
第Ⅱ部　再生産の再定義――ゆっくり減退する嬰児殺し　一七九〇―一九五〇（第八章から第十三章）
結論　結論（第十四章）

本書の理論的課題は、三百年の長期的視点から、人口転換理論、すなわち近代化により社会は高出生率から低出生率へ変化するという理論の再検討にある。東北地方の出生率は、徳川期には日本でもっとも低いが、一九二〇年代には日本でもっとも高くなる。すなわち、近代化のなかで出生率が三・〇から六・〇へ大幅に上昇したことになる。本書は、この出生率を左右させた間引き（嬰児殺し）の実態・間引きへのまなざしの変化を明らかにしようとする。

そのために、一方でシミュレーションを用いて出生率を求めるなど、高度な人口統計技法を使う。他方、嬰児殺しにまつわる言説や祖先祭祀のあり方など、間引きを求める文化、間引きを忌避する文化を広く考察する。いわゆる量と質の「共演」である。先に示したように、従来の手法では間引きの実態（その頻度）を明らかにするのは難しい。出生性比を求めることで間引きが一般的かどうか、男児選好が強いのか、男女のバランス重視なのかは分かる。しかし、出生性比では生まれるはずの子どもの何割が間引かれたのかを特定することは難しい。

著者は、徳川期については、既存の歴史人口学データベースに、膨大な量の戸口資料を加えて約七八万人分（人年にして五五〇万人年分）のオリジナルのデータセットを構築し（table A1, p. 259）、そこからシミュレーションをおこない、間引きの頻度や出生率（生

きることを許された子ども数）を推計した。近代については、おもに死産統計を用いて同様の推計をおこなった。

そして合計出生率は、一六五〇年の六・五から徐々に低下し、一七九〇年には三・〇まで落ち込むが、そこからゆっくり上昇し一九二〇年には六弱へ、その後再び減少し一九五〇年には四程度となることを示す（fig. 1, p. 10）。一六六〇年から一九五〇年までの三百年間の出生率が一枚の図に納められ、十八世紀末が底で、二十世紀初頭が天井となる「減少―増加―減少」というゆるやかな波が描かれた。その波に大きく影響を与えたのが、間引きであり、十八世紀半ばには、生まれる子どもの三〇％が、十八世紀後半のもっとも多いときでは四〇％から五〇％が間引かれたと推計している（fig. 11 & 12, pp. 114–115）。にわかには信じがたい驚きの数字である。

シミュレーションの詳細については付論を読んでも情報が完全ではなく、その妥当性を十分に検証することはできなかった。近代の死産統計についても、資料自体がどの程度信頼できるのか、どのような利用が間引き分析に妥当なのか、人口学者の共通理解は得られていない。このように本書の分析手法や資料批判は必ずしも十分とは言えない。しかし、徳川期については五五〇万人年のデータセットを、近代については大量の死産統計を用いた今までにない規模の分析である。個々の数字の信頼性については今後の検証を待つとしても、現時点では「大きな見取り図が得られた」と考えていいのではないだろうか。

勝手な推察であるが、だれもしたことのない「大胆な」資料の使い方をしたために、著者自身も、ここに出てきた数字には当初一〇〇％の信頼を持ちえなかったのではないか。その「不安」ゆえに、膨大な量の文献探索、大量の言説分析をおこない、量と質の「共演」を試みたのではないか。蛸壺となって久しい現代の学術環境のなか、たった一人で「学際的」研究をやりきった著者に喝采を送りたい。

註

（1）本論文の初出は一九七〇年代であるが、ここでは一部改変された一九九二年の文献を使った。

（2）速水融は人口・家族指標をもとに日本を三つの地域に分類する。「東北型」「中央日本型」「西南日本型」である。ここで用いる「中央日本」はこの三類型のひとつを指す。

参考文献

Hanley, Susan B. and Kozo Yamamura. 1977. *Economic and Demographic Change in Preindustrial Japan, 1600–1868*. Princeton: Princeton University Press（速水融・穐本洋哉訳『前工業化期日本の経済と人口』ミネルヴァ書房、一九八二）.

速水融　一九九二　『近世濃尾地方の人口・経済・社会』創文社。
平井晶子　二〇〇八　『日本の家族とライフコース』〝ネルヴァ書房。
Smith, Thomas C. with Robert Y. Eng and Robert T. Lundy. 1977. *Nakahara: Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717–1830*. Stanford: Stanford University Press.
友部謙一　一九九一　「近世日本農村における自然出生力推計の試み」『人口学研究』第一四号、三五―四七頁。
Tsuya, Noriko and Satomi Kurosu. 2010. "Family, Household, and Reproduction in Northeastern Japan, 1716 to 1870." In *Prudence and Pressure: Reproduction and Human Agency in Europe and Asia, 1700–1900*, by N. O. Tsuya, W. Feng, G. Alter, and James Lee, et al. Cambridge: MIT Press.